# ダンス創作過程に関する事例研究

岐阜大学　熊谷　佳代

## はじめに

ダンス作品は個人の体験，思考，感情などに端を発して創造されるものであり，その過程においては内面の探求が強く求められる。その探求は自分自身によって自分自身を理解していくことを意味する。

本研究は，ひとつのダンス創作過程をたどることにより，ダンス創作がどのように自我の拡充をもたらしたかを事例的に報告する。

事例　36歳　女性　A

Aは2児の母親である。第2子の妊娠・出産，時を同じくして第1子の反抗期を機に育児に対してストレスを感じるようになる。思うような育児ができず，次第に，母一子関係に歪みが生じる。しかし，Aはそのことに対して，一時のことでありいずれ解消されるであろうと深く考えることなく，日常に忙殺されていた。

ダンス公演の話を持ちかけられ，久しぶりに舞台で踊ることを決める。

## ダンス創作過程

舞台発表までの6ヶ月間と舞台後を4期に分け，Aの創作記録をもとに報告する。

第1期：構想期（X年9月）

結婚して子どもにも恵まれ，決して一人では味わえなかった喜びや驚き，時には苦しみをも与えてもらっている。ダンスで“今の自分”をそのまま表現してみようと思う。

子育ての過程でAは理想の母親を求めるあまり，自分らしさを抑えていることに気付く。自分が心底から感じていることを奥底に隠し，表面的にわかった振りをして子ども達に付き合ってきたようである。

感情が抑えられているためイライラ感が募るばかり。そのうちそれが限界に達して爆発してしまう。自分だけが，母親だけがなぜこんな思いをしなければならないのか，子どもをどう育てていいのかわからなかった。しかし，このように子どもと関わるうちに，思い通りにならない事が多くて大変だが，そんな子育てがやっと面白いと思えるようにもなる。こんな想いを作品にしたい。

第2期：停滞期（10月～12月）

約3ヶ月半創作活動が停滞する。

第3期：制作期（1月～2月）

思い悩んでいるうちに子どもを抱くという動きで母親を表現することにする。作品の構想を夫に話したところ「ピエタか？」と応える。マリアが作品の母親像と結びつく。しかし，これまで創作に取り組む気持ちが持てず，何も進まないまま時間だけが過ぎる。なぜイライラして育児が大変だと感じるのか，鳥山敏子の「居場所のない子ども達」を読んで気付く。子どもは自分が親に求めていたことを自分に求めているのだと。自分が親との関係で育ててこなかった部分を子どもとの関係で育てないといけないのかもしれない。

女性が子どもを抱き，その周りを天使が飛んでいる絵が思い浮かぶ。どこで見たものなのか思い出せない。自分自身のヴィジョンなのかもしれない。その女性は白っぽい服あるいは布をまとい，子どもを抱き優しく微笑んでいて優しさと強さが同居している感じ。

作品のタイトル“私の中のマリア”に仮決定。

白い布を使うことに決める．白い布＝母性（母親）の象徴．頭の中で作品が一気に出来上がる。

第4期：完成期／公演後（3月～11月）

＜本番＞過去を振り返る場面では，親に抱かれたいと思う子どもの自分に戻ったようだ。涙があふれそうになる。正面を向き現在の自分に戻ると子どもをしっかり抱きしめたいと強く思う。

＜公演後＞母性って何？この世の中いろいろな母親がいるけれど母性が有る／無いなど誰が判断するのだろう。何が判断基準になっているのだろう。いろんな母親が居ていいのではないか。母親になり2人の子どもを持ったその意味がわかった。子どもを持つことにより自分の「影」の部分，生きてこられなかった半面を生かせてもらっている。子どもが自分の「影」となり自分の前に現れている。そう理解することで母としての役割，意味がわかってくる。

## 考察

自分の生き方について考え，それを実行しながら成長してゆくことを，ユングは「個性化の過程」と呼んでいる。1つのダンス作品を創作する時，自分の内面に向き合うことで探求が始まり，自我の拡充が起きる。本事例での作品を創りあげていく過程はまさに「個性化の過程」と言える。また，「個性化の過程」には非日常の場の設定が必要であり，儀式や祭りなどの体験を重視している。本事例においては，ダンスという非日常な世界に身を置くことで，「影」の存在に気付き，それと対決しながら統合していこうとする「個性化の過程」を歩んできたのである。

文献
河合隼雄（1991）イメージの心理学，青土社